シリーズ62

届け！がん患者たちの声

失われた声を取り戻す「シャント法」もっと普及を！ 公的援助の拡大を！

喉頭摘出者が話せるようになる「気管食道シャント術」を広める患者会の活動

喉頭がんや下咽頭がんなどの手術で喉頭を摘出すると、声帯が失われ声が出なくなります。声を取り戻す方法の1つが「気管食道シャント法」。しかし、日本ではまだ知らない人が多く、また、日々の手入れに一定額の費用もかかることから、患者団体はシャント発声法の普及とともに国や自治体の経済的支援を訴えています。

取材・文●町口 充

欧米ではシャント法が主流だが

喉頭がんや下咽頭がん、食道がんなどの手術で喉頭を摘出すると、声帯が失われます。同時に、喉元に「永久気管孔」という孔をあけて新しい空気の通り道をつくるため、呼気も口まで届かなくなり、声を出せなくなります。

失われた声を回復する方法として、最近、普及が進んでいるのが、「気管食道シャント法」です。気管と食道を「ヴォイスプロテーゼ」と呼ばれるシリコン製の短いチューブでつないで連絡路（シャント）を作ります。そして、ここを通して息を食道内に引き込み、食道の粘膜を震わせて声を出す仕組みです。少しの訓練で、より自然な会話ができるようになります。

欧米では多くの人がこのシャント法で声を取り戻していますが、日本では5％程度の人にしか普及していません。そこで、声を取り戻せずにいる方にシャント法を知ってもらうための活動をしているのが、喉頭がん、下咽頭がんなどの手術で、喉頭を摘出した患者さんが集う特定非営利活動（NPO）法人「悠声会」です。

ロンドンで知った発声法「一体これは、何？」

同会の会長で東京・町田市に住む土田義男さん（75歳）は、9年前に下咽頭がんのため喉頭摘出手術を受け、声を失いました。

ある患者会に入って教わったのが「食道発声」という方法でした。喉頭摘出者の代用音声として日本で多く採用されているのが、この方法。口から空気を飲み込んで胃にたくわえ、ゲップと同じ要領で吐き出して発声します。

「私は早いほうで、7カ月で上級に達するまでになりました。仲間うちでは『上手になったね』

悠声会を立ち上げた幹事の土田義男さん